

話なんですね。今まで日本は…先ほどの家族の話でもね、身内の文化っていうのはすごくあって、それに対して社会の人権だとか、社会だとかに目覚めた市民たちがぶつかり合うと、まず最初に家族にぶつかる、そんな話なのかなあと思ったりして伺っていました。それは市民活動でさえそうだと。

僕は、こういう市民活動を科学するとかそれ以外の当事者運動の世界からでも、人間科学という視点から見るとというのは、結局、そういう常識とか、ドグマという大変かもしれないけど、あるいはタブーとかいうものを解き明かして行って、で、真実の有様に迫るのが科学なのではないかと、そんなことを思いながら、あまりしているわけではないんですが。でもね、昔、オダマコトという猫背のおじさんがいてはるんですけれども、彼と結構真剣に話し合った時に、論理やって言いますね。市民活動は絶対論理やと。論理を持たなかったら折り紙もかたれへんとか、彼は言うわけですけれども。つまり、彼の中にあるのは、権力もない市民活動が、社会的な影響力持つのは、やっぱり論理、論理というか、人権とか筋とかね、そこをきちんと詰めなあかんから、そのためには科学的な線も絶対大切やということを、あのオダマコトが言ってましたですけれども。えーそうだなあと感じておりました。で、あの、どうしようかな、あんまり長い話をしているとあれなので、あと5分ぐらいで終わるように努力をしたいと思います。

大熊： 奥さんがちょっと、奥さんというと、どこの奥さんかと思う方も、奥雅博学部長が、お話をしたいと。

早瀬： あ、はい。

#### － 当事者に「会う」ことの必要性 －

奥： いや、宜しいですか。続けて頂いても宜しいんですが。

私も喋らなきゃいけない時期がきたなと思っていまして。まず最初は紋切り型の挨拶ですけれども、多くの感動と多くの驚きを持ってお話を聞かせて頂いたということは、まず最初に申し上げたいと思います。ただ、すぐその後で、何か話をしていくと、ほんまのところはよう分かってないじゃないかっていうところが出てくることは、もうこれはあの、承知の上でのことなんです。ということが、まずいちばんの感想です。

それから、次は、尾上さんに関して教えていただきたいことなんですけれども、このところで、人間科学部はどれだけ歩きにくいかということ进行调查して頂いたのがありまして、これを大熊教授が、事務局に話を持ち込んだことは、私、承知しております。あ、あそこに、札が、ラベルが貼られたっていうことも知っています。それで、…ではないけれども、何点かついている。そして、そういうことは分かっているんです。で、次やらなきゃいけない改革これだけあるだろう。建築の心のある方が書いてくださって。ただ、私、そのところで、事務部が何してるか知らなかったんですけど、随分よくやってくださっているなあとと思いますが、私が役人なら、まず予算がないと、そこから話を始めていこうと思う。ところが、ありまして、例えば、教務掛にすぐ座れるところがない。車椅子。そうすると、隣の部屋に入るところから僕はやった方がいいんじゃないかと思う。つまり、隣の部屋でもうちょっと低いテーブルの所にご案内する、そういうことです。それも、1人2人でいいけれども、これについてひとつ、運動のやり方があるとするんですね、そういうことをやるのは扱いとして具合が悪いんで、もし前から、10人なら10人で車椅子の人が来たらどうするか、こういう運動をなさるか、というようなこと

ろに、具体的なやり取りのところで教えていただきたいと思うことがあるのは、うちもスロープがない。それから、障害者のトイレがあつたりするけれども、実際使い物にならないようなことがどうしてできるんだろうということと、それがひとつ。

それともうひとつ、そうした場合、色んなことが考えられるけれども、具体的なことから解決していくというのがひとつの言い方じゃないか。と、言いますのは、これは本人が喋っていいって言ってますからあれなんです、盲学校出身の視覚障害者が大学院合格しています。そして、阪大でそのレベルの方を受け入れた経験、まだないそうです。だから、うちから初めなければいけない。そして、その場合、視覚障害者の一般的な基準からいって準備するというよりは、その方に合わせてやっていく、そうしないと、もっと重い人が来た場合には、全然使わないものがシボル的にできてしまう、ということがとてもあるような気がしますので、そのあたりのところで、具体的なことについて、何か、サジェスチョンして頂くことがあれば有難いなと思っています。

大熊： 配布資料をまだちゃんと読んでいらっしゃらない方は、今の奥学部長のお話が、よく分かりにくかったかと思いますが、ここに、学生の人たちが、授業の後で尾上さんと一緒に、この人間科学部というところを回ったら、あまり人間科学部的じゃないということが明らかになって、非常口を出ようと思ったらすごくバリアがあつて、もし火事があつたら、あの時点で尾上さんは焼け死んでるとか、いろんなことが。トイレへ行くと、それは誰も使われていない模様で、ということは、そこにトイレがあるということがマップに書いてないとか、いろんなことが分かつて。これ、このまま、実は、透明性の大阪大学ですので、隠さず書いてあつて、それを奥学部長がたいそう気になさっているという次第なのですが、今のことで何か、お答がございましたでしょうか。

#### － 本人の声を大切に －

尾上： 特に、これから、視覚障害の学生さんが、学生さんというか研究生が入学されるんでしたら、ぜひ、その人に直接会ってですね、意見を聞いていただくということがいちばん大事な点かなというふうに思っています。私、実はこういう活動を始めるきっかけというのは、私が大学時代の経験というのは結構大きかったんですが、ひとつはその当時の、柴田先生という、ボランティア協会の理事長さんですが、その方が障害者問題委員会というのを作っておられて、その人がわざわざ、私の家に、いわばその当時の教授ですね、市大生の家に電話をかけてきて、一度ちょっと会いたい…

大熊： 大阪市立大学ですね。

尾上： 大阪市立大学の障害者問題委員会。何か困ったことないですかと、いや、階段しかないんだけど、いやまあ、今までも高校も中学校も階段だけでしたしね、みたいな話、最初オーソドックスな話をしてたんですが。今日もっとちゃんと、困っていることをはっきり言ってくれたまえとか、どちらが…を聞かされてるのかわからないなという感じで。むしろ、丁寧に話を聞いてくれました。もちろん、一般的な基準、例えば、入り口からそれぞれのキャンパス、あるいは教室の入り口の所までの、展示ブロックのひき方であるとか、あるいは、ちょっと弱視なのか全盲なのかちょっと私その方分からないんですが、それによってかなり違ってもきますけれども、一般的な基準というのがありますが、同時に、その彼が、ここで、彼なり彼女なりがここで学ぶために必要な移動の問題だけじゃなくて、例え

ば、色んなプリントや、色んなレジュメとかありますね、それが墨字で提供されるだけでは、全然意味がないわけです。それをどういうふうに提供するのかとか、どういうまずニードが、どういうニードがあるかということ、掴むということ、まずそのことを聞いていただく事が大事ななというふうに思います。

## － バリアフルな建物も当事者の目からの改修を －

尾上： それと、ここの大学のバリアフリーについては、学生さんが、非常に、短期的にできること、中期的にできること、長期的にできることということで、非常にクリアに、整理されていますけれども。これに付け加えることは敢えてないんですが、できればですね、思いますのは、これはちょっと苦言のように聞こえるかも分かりませんが、このキャンパス自身は、たぶん築10年ぐらいでしょうか。

奥： 築30年。ここは築5年ぐらい。向こう側は築25年過ぎてます。

尾上： 5年ぐらいですね。とすると、ちょっと苦言になりますけど、築5年にしては、あまりにも入り口、表玄関は段差しかないというのは、かなり古いデザインになってしまっている。私から言わせれば、25年前ぐらい、25年前いうとちょっと失礼です、20年ぐらいですね、1981年当時のデザイン。入り口に段差があって裏から回れば入れるというデザインになってしまっている。例えば、大阪、ここは国立ですんでね、大阪府のまちづくり条例の対象外というのがいちばんおっきな問題ですから。大阪府のまちづくり条例に準じれば、たぶん、ちょっと厳しい言い方になりますが、こういう風な建物は、10年前から作れないようになっていましたので、こんなものはできなかつたと思ってます。

要は何を言っているかということ、裏、こちらから入れなくて、功回らないと入れないんですね、この建物ってね。言わば、裏口から車椅子は入ってくださいという建物の設計思想なんですね。で、次のもし改修の時には、ぜひともそういう自治体レベルでの、非常に進んだマニュアルや技術水準というものがありますし、それだけではなくて、何よりも、今回、私、ちょっと口を割った言い方ですけど、わずか半日、学生さんと一緒に動くだけで、たくさん問題が見えるわけです。やっぱり、当事者こそが全てとは言いません。当事者が全部分かっているなんて全然思わないんですが、でも、図面だけ見て作ったいろいろなものっていうのは、これまで失敗の経験が多々あるんですね。

今日もうちょっと時間がなくて話してませんが、例えば、今、大阪で、リフト付きバス、今はもうノンステップバスになってますが、今から11年ぐらい前に、走り出したんですが、大阪で初めて。で、いわゆる全国で初ということで、日本で初めてのリフト付きバスなんで、その試作品をですね、私たち、その当時の大阪交通局と、一緒に香川県まで10人ぐらいの車椅子の障害者と一緒に行きました。で、びっくりしました。そのリフト、3台のステップが伸びたリフトがですね、奥行きが125cmぐらいしかないんですね。で、電動車椅子というのは、大体、乗った段階で、125cmから130cmぐらいあるんです。で、乗って上がろうとしたら、足をするんです。思わずその工場の人に、おっちゃんこれ足はさまれまっせって。「え、なんでですか、この電動車椅子特注ですか」「いやいや、これ8割ぐらいのシェアあるものですよ」て話。「あーすいません。私ら、車椅子っていうのは、図面と、乗った姿じゃなくて、病院から借りてきたこれしか見たことないから」って。つまり、やっぱり人間の想像力に一定の限界がある。人間っていうのは想像力があるから共感できる部分もあるけれども、そこはやっぱり当事者を交えた上での共感なのかどうかっていうことに、大きな違いが

あると思うんですね。そういう意味で、ぜひ、なんていいますか、批判というか、いちゃもんというか、クレームとつけるというよりは、より良いキャンパス、単に構造だけじゃなくて、情報や色んな授業のプロセス含めて、変えていくために、積極的に、新しく入学されるその当事者が、いわば、ここの課程を卒業される4年間、2年間なり4年間なりで、この大学はこれだけ変わったというね、きっかけにして頂けたらなというふうに思います。

#### － 建築の世界にまだ広まっていないバリアフリーの概念 －

大熊： 有難うございました。実は、これ、すごくボランティア講座的なんですけれども、そもそも、午後、せっかく来た尾上さんに、この学校を見て頂こうと思ったのも学生さんたちの、自発的な、あふれ出る思いでした。で、私の授業には、なぜか自発的にいらっしゃってる、単位と全然関係ない学生さんがたくさんおられました。今日もかなりご年配の方とかもいらっしゃるのですが。そんなに年配ではないもぐりの学生さんの、中島さん。

中島： あの、工学研究科の、大学院生で、ちょっと年だいぶってます。今日、すごくいいお話で、工学部の方の研究室の先生にも来て欲しかったなあと思ってるんです。元々、介護を、障害者の方の介護をしてたので、尾上さんが来た時に、一緒に見て回りましょうって、言い出しっぺなんですけども。工学部はもっと、ちょっと、更に困った状況にありますので、人間科学部はまだましと言ったら失礼ですけども、こんな早く対応して頂いて、素晴らしいです。

もうひとつね、今のね、当事者の参加っていうところでは、ユニバーサルデザインとか、バリアフリーとかっていう言葉の中でも、工学的にも、ユーザー工学みたいなもので、今、パソコンの方のユーザーの使い勝手を知ることから良い商品を作っていこうという動きがあります。建築の方では、そういう発想がまだまだ薄いんですね。だから、ここの、人間科学部の対応が悪かったということではなくて、こういう建築学会も、まだ発展途上のところにあるということだと…

#### － 鷹巣町の取り組みにヒントを得て －

大熊： 庇ってくださいますと有難うございました。ここの中で、3つに分けて、書いてあるんですけども。これは、秋田県の鷹巣という町の市民の活動からヒントをいただいたものです。福祉の遅れた町から、今、日本一になっている、それが住民の人たちのボランティア活動から始めた。で、その時に、住民の人たちが、いろいろな問題点の中で、すぐできること、ちょっと工夫すればできること、予算を組まなければできないこと、というのに分けて、それを順々に、まず自分たちでできることをやってみる、それから予算もできればつけていただくということをしたのにヒントを得たものであります。

で、ここにも書いてありますように、私が最初伺ったときは、予算がないというようなお話でしたが、学生さんたちが色々やってみる内に、ここに事務長さんがいらっしゃいますので、何分、宜しくお願ひしたいのですが、予算が3月に余りましたらば、ぜひ、ここで陳情しておきます。最初の内は、壁には物を貼っちゃいけませんという規則があったので、そのために、後でちょっと御覧になると、トイレの上の方に、車椅子トイレはどこどこにありますというのが小さい字で書いてあります。でも、もう一遍、これじゃあ車椅子の方が来た時には、見えない

ということにまた気が付いて、で、また事務の方をお願いに行きましたらば、一緒に、ここにも貼ったらどう、ラミネートの紙は提供しましょうとか、ほんとに親切に、して頂いて、学生たちは、事務の方たち大好きになっちゃって、さっきのじゃないけれど、最初ちょっと、闘う相手かなとか思ってたのが、今はお仲間という感じになっています。

えっと、5時にお帰りにならなきゃいけない方もいらっしゃるのですが、始まりが10分遅れていますので、皆様、語り尽くせなかったことが色々あると思いますので、順番どうしようかな、じゃあ、深雪さんからこうこうきて、しめを、早瀬さんをお願いします。

## － 専門家とのパートナーシップ…当事者の評価をフィードバックして －

尾上： 今日ですね、話の後半でと思ってたのが、いわゆる専門家と言われていた人たちのパートナーシップというか、協力関係の重要性なんですね。実は、今、私たち、障害を持つ者といいますか、車椅子に乗っている者たちの間で、非常に危惧していることがあります。実は、日本製の電動車椅子は、だめなんじゃないかというような水準になっています。実は、日本の電動車椅子、1980年段階では、そんなに、世界的に見ても悪いレベルじゃなかったんですね。でも、基本的に、今、私が乗っている電動車椅子っていうのは、1979年ないし1980年に開発されたものを、多少デザインを変えたり、バッテリーを変えたりした程度の変更だけであります。で、ほとんど、でも目利きのきくユーザーは、アメリカ製のものや、スウェーデン製の電動車椅子を、自己負担を加えた上で購入したりしています。これは、決して、日本の技術力がないわけではなくて、その技術や研究を誰と共に、そしてどういうところに投資をするかということが、非常に欠けているからではないかなと思うんですね。

ま、先ほどリフト付きバスの話をしました。それで、私たちが検証した結果、結果的には、15cmぐらい伸びて、140cmの奥行きになって、お蔭でといったらなんですが、大阪市の市営バスのリフト付きバスは、足がひっかかることはなく、無事にちゃんと乗れるようになりました。あるいは、同じように、これは大阪市だけじゃなくて、この10年間ぐらい、やはりバリアフリーや、いわばいろんなブームのように、いろんな高齢者対応、障害者対応というのが、できてきているんですが、実際には使えなかったり、あるいはなんとか使えるけど、先ほどのユーザー工学ということに関係するんですが、使い勝手、感情的な評価といますか、使えるけど使いにくかったら誰も使いたくないと思わないですよ。使い勝手の部分の意見のフィードバックとかをほとんどされない。ま、ちょっと硬い言葉でいうと、日本のシステムっていうのは、当事者や利用者の評価システムというのが不在であったり、あるいは先ほども申しましたが、研究者やエンジニアの人たちが、そもそも障害を持っている者と普段からつきあったことがなくて、慌てて図面を取り寄せて設計をするというようなレベルでいってしまうからですね。いわば、むしろ、そういうアドバイザーや、そういうところに当事者が入って、いわばそういう意見を常にフィードバックしながら、どんどんグレードが上がっていくアメリカやスウェーデンの福祉機器に比べて差がついたのも、この25年、特にこの10年なんだなと。

で、まあ、捨てたものじゃないというたら変ですが、例えば、ちょっともう時間ありませんが、アメリカで、実は聴覚障害を持つ人たちは、ビデオやテレビを自由に楽しむことができます。今、一般のテレビの8割ぐらいに字幕がついてるんですね、アメリカのテレビ。で、実はそのアメリカのテレビを、輸入してる、多くを作ってるのは日本のメーカーなんです。日本のメーカーは、アメリカの聴

覚障害者が楽しめるテレビはたくさん作れるんだけど、日本ではそういう法律や技術開発っていうのをそこに向けないから、日本の聴覚障害者は、未だにテレビを、まあ、NHKやいくつかの、2割ぐらいのテレビしか楽しめない。というふうな状態にあります。技術力がないんじゃないで、それをどういうふうにごう生かし、どういうふうにごうフィードバックしていくか、そこがポイントなんだろう。そういう意味でこれからの21世紀ということで、いわば当事者と、その研究者や、あるいは企業や色んな人たちが、手を携えて、いいものを作っていくという点でね、協力ができたらなというふうにごう思っています。以上です。

## — ユニークフェイスの研究を —

大熊： はい、じゃ石井さん、宜しくお願ひします。

石井： はい。え、最後ですが、色んなこと話したいんですが、ま、いちばん最初にお話していたことをもう一度繰り返させて頂きます。えと、顔面に傷やあざがある人たちの心理、社会状況についての調査研究をぜひして頂きたい。ほんとにぜひして頂きたい。それをグローバルな研究成果として、…人たちに話をしていく。そういう努力をする学生、研究者を、今でも求めています。それに尽きますね。で、今までも過去、人間科学、ソーシャルサービス、日本における努力の中で、私たちに對するサービスの構築等については、ほとんど研究成果、全くほとんどありませんので、それを責めても仕方ありませんが、まあ、挑戦的な言い方をさせていただくと、このままでは、ユニークフェイスがどんどん情報を蓄積し、専門家を乗り越える存在として成長していくでしょう。そういうふうにごう私、狙っています。それはやはり、誇り高き人たちにとっては、屈辱だと思ひます。挑戦的な発言をさせていただきますが、うちの会員、京都大学の学生もいます、代表世話人、松本学もおりますし、九州には熊大の教授もおります。私がいちばん学歴が低いですけれども、これからも続々と、人材が集まってくるという確信があります。で、当事者には当事者の研究だけではなくてですね、広く社会の問題として共有する上で、私たちは門戸を全面的に開いております。ぜひ協力をいただきたい、そして、共に、顔にあざや傷のある人たちのメンタルサポート、ソーシャルサポートをして頂きたい。いじめは今も続いています。自殺も続いています。止めなければならないんです。宜しくお願ひします。

## — 地域で、精神障害が受け入れられるように —

大熊： では、山本深雪さんお願ひします。

山本： そうですね、私は、自分を振り返っても、弱い部分、すぐ忘れっぽかったりね、定期券どこに入れたっけとか、免許証どこだっけとかね、若い頃からこうでした。傘も、どこだっけな、そういう時の、こうね、嫌がってしまったり怒ってしまったりすると、余計に後ずさりするしかない。そういう人もいるという事実からまあ出発して、弱い時には弱いなりに、元気な時には元気ななりに、そして、柔軟な波がある生物体なんだっていう感じで、認め合っているような関係が地域にもっともっと広がればいいなと願っています。で、かかりつけ医に、気軽に、総合病院の精神科がもっともっと増えて頂きたいなと思ひますし、できることであれば、入院という、長期入院に至らずに、世間から関係が切れてしまう前に、地域で利用できる作業所であったり、生活支援センターなんか、中学校区に1個ぐらいできていく、そんな地域にしていきたいなと思ひますので、

どうか、地元に戻られた時なんかには、もし反対署名とかが回ってきたら、ちょっと変なんちゃうみたいなことを口にして頂ければ、とても力強く思います。

大熊： 有難うございました。人間科学部長がそういうふうに言ってくざると、随分、地元で威力を發揮すると思ひますので、宜しくお願ひします。

#### － 当事者性という専門性 －

早瀬： 今日は、当事者性という専門性というかですね、こう非常にすごく刺激を受けた日ではないかというふうに思ひました。でまあ、あの、最初の方のこの話の流れというのは、やっぱり、当事者が専門家だとか、あるいは行政だとかといったところと、非常に対立しやすい構造になりやすいというような視点があつたと思うんですよね。で、昔、イエーリングという人が書かれた、権利のための闘争という、有名な本がありますが、あの本の書き出しはこうですよね。「法の目的は平安であり、その方法は闘争である」というのが書き出しの有名な文句ですけれども、平安のために闘争でないといけないという、まあところが。

ただ、一方ですね、なんか宗教的ですけども、マザーテレサの有名な言葉があつて、愛情の反対は憎悪ではなく無関心であるという、とっても有名な言葉がある。闘っている同士は、とにかく関心を持っている同士であることは確かなんです。阪神ファンである私は、巨人ファンのこと信じられない部分があるんですが、サッカーファンよりは仲間であるという部分があるわけですね。そこは忘れなくてはならないとついつい思ってしまうんですが。やっぱり、なんかその、当事者性、やっぱりこれ、難しいのはね、これ一方でね、今日はあまり話でなかつたんですが、当事者っていうのはね、強いんですよ。当事者でない立場から、非常に臆する面がある。実際みんな一人一人が人生の当事者なんですけれども、当事者の方々が色んなトラブルの中で一種の被害者意識的なことになると閉じるわけですね。逆に専門家の方は専門性だとかごちゃごちゃ言つて閉じていたらどう仕様もないわけで、多分科学というのはですね事実学に学ぶわけですから、事実を聞いていくことの中でそういう溝を超えられるような、それが人間科学のこれからの使命だという話をしたら、きつとうまく終われるのかなと思つて終わりました。どうもありがとうございました。失礼しました。

大熊： さすが教官、というコメントで、感動いたしました。ご出席の人間科学部の先生方のお役に立てたでしょうか？ 領いてくれた方が大勢おられてうれしいです。ありがとうございました。今日の時間を共有してくださつたおおぜいの皆様にお礼を申し上げたいと思ひます。

平成13年度厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

障害者福祉における行政と当事者の  
パートナーシップの可能性に関する研究  
報告書

平成14年3月発行

編集・発行 大熊 由紀子（主任研究者）

〒154-0002 世田谷区下馬6-45-9

ファックス 03-3410-7589

Eメール dzy00573@nifty.com

HP：<http://www.yuki-enishi.com/>

印刷：阪東印刷紙器工業